

ワインのお詫び

時崎 久夫 (札幌大学)

原口先生が英語学会の会長になられたとき、大会の懇親会で、友人と話がはずんで大笑いした拍子に、背中が何かにぶつかりました。すみませんと振り向くと、そこにはワイングラスを片手にした原口先生がいらして、こぼれたワインが先生の白いワイシャツに赤く大きくひろがっていました。会長に何てことを、と真っ青になった私。そのとき先生は、「僕は体全体で飲むから、いいんだよ」と笑って言われたのでした。なおもひたすら謝る私に、「いつもクリーニングに出すから大丈夫」と平然としておられました。私がどんなに救われたことか。もう一度、お詫びと感謝をここで述べさせてください。なんと大きな方と私はお近づきになれたことか。

直接の学生であったことのない私に、先生は分け隔てなく接して下さいました。いつも『月刊言語』などのご論文の最後にあった、「原口庄輔 (英語学・言語学)」あるいは「原口庄輔 (音韻論・統語論)」という表記が格好よくて、学生の頃から憧れていました。いつかそんな学者になりたいと。論文を送り、学会などでお会いし、アドバイスをいただくようになり、海外のセミナーや学会でもお話しさせていただきました。

近年、音韻論学会で私が類型論のテーマで発表したときに、「こんなロマンチックな研究をするとは思わなかった」と言っていたことが私の誇りです。「類型論をやってみるかなあ」とおっしゃっていた先生が代表を務められた最後の科学研究費プロジェクトは音韻の類型でした。チームに参加させていただき、いつも励ましていただいたことを心の支えにしておりました。先生が、そんなことはいいんだよ、と言われても、これからもワインのお詫びを続け、研究を続けます。ありがとうございました。

(日本英語学会／日本音韻論学会／アメリカ言語学会／科学研究費分担者)